



自動で細胞を培養するラボ・ベンチロボット

同大医学部との共同開発。車体組み立ての現場で進んでいる自動化の技術を他分野に応用する。

温度を一定に保った装置の中から細胞入りのフラスコを取り出し、古くなった培養液を新しいものに交換して装置に戻すまでの、一連の細胞培養の作業をロボットが自動で行うようにする。ロボット本体は他社製だが、プログラミングを同社が手掛ける。

大手ロボットメーカー

桐生・ウエノテクニカ

細胞培養ロボット開発

医薬品研究を効率化

自動車車体組み立て設備の設計、製作を手掛けるウエノテクニカ（桐生市広沢町、松井真二社長）は自動で細胞を培養するシステム「ラボ・ベンチロボット」の開発を進めている。これまで研究者が行ってきた作業を、1本の腕を持つロボットが忠実に再現し、医薬品研究の効率化、省力化を進める。7月にも群馬大で実証実験を始め、本年度中の商品化を目指す。

「がすでに同様のシステムを商品化しているが、普及が進んでいないのが実情という。同社製品は従来品と違ってロボットの周囲に柵を設けない小型構造とする。導入費用は従来品の3分の1程度に抑

え、研究室にも導入しやすくする。

ロボットはタッチパネルで簡単に操作できるようにした。液体を吸い上げる電動式ピペットの操作は無線で制御し、動作の精度を高めた。器具を入れ替えることでさまざまな研究に転用できる。

開発は1年半前に始まった。SI開発ディビジョンリーダーの吉原明さんは「研究者の人手不足を解消しよう」と開発を始めた。ロボ

ットの方が人間より精度の高いデータが取れる面も明らかになった」と説明する。チームリーダーの亀山真悟さんは「これまで取り組んできた自動車関連とは全く違う分野だが、一つ一つ課題を乗り越え、質の高い商品に仕上げたい」と話している。

同社は広島市に本社を置く自動車部品メーカー、ヒロテックの関連会社。